

サギタリウスチャレンジ結果報告書

Let's Study 携帯サイト（みんなで学ぶワークショップ）

京都産業大学地域安全防犯推進隊サギタリウスチーム

代表 津川 大輔

企画概要

近年、携帯サイト利用料金の架空請求や、出会い系サイトがきっかけの犯罪など携帯電話やインターネットに関する犯罪及び被害（ネットトラブル）に未成年者が巻き込まれるケースが急増している。10代は自分の好奇心を抑制しにくい年代と言える。簡易に、短時間で膨大な量の情報を得ることができるインターネットは、非常に便利だが、様々な手口の犯罪があり、いつでも被害者になってしまう危険性があることを強調し、今後さらに携帯電話やインターネットを身近なものにしていく青少年を対象に、防犯意識の強化、ひいては地域の青少年の育成を目的とした啓発を促す事に加え、大学生と青少年との交流を図ることを意図とした企画である。

結果報告

開催日時 2005年3月5日（土）

午前10時～午後1時

会場 京都産業大学 神山ホール 第一セミナー室

プログラム

10:00～ 隊長挨拶

10:10～10:40 最新の手口や悪事の誘いの事例紹介

10:40～11:10 あなたはだまされないか？実演で対策

11:10～11:30 悪いヤツの撃退方法をレクチャー（護身術）

11:30～12:00 大学内を巡るキャンパスツアー

12:00～13:00 昼食会

13:10～ バスにて本学出発

主催 京都産業大学学生地域安全推進隊（サギタリウスチーム）

協賛 上鴨防犯推進委員協議会・上鴨警察署・京都産業大学

後援 京都市教育委員会

1 企画変更の箇所

当初、中学生を対象にする予定であったが、参加者が集まらず、急遽、企画内容を変更し、小学校高学年の児童を対象とした。少ない人数だったが、参加した小学生や保護者の方々に、役に立つ情報を知っていただき、防犯意識の向上に少しでも役立てていただければ良いと思い、企画を実行した。

2 企画内容の説明と反省

津川隊長の挨拶

「Let's Study ケータイサイト」企画の意図を、小学生に対して説明。「みんなで楽しく勉強して、被害者にならないようにしましょう！」と、防犯推進の為の企画であり、皆で楽しめる企画であることをアピールした。

実例紹介

まずはスクリーンとプロジェクターを利用したプレゼンテーションを行い、小学生が日頃あまり見る事の無い設備を使う事によって、小学生の興味を引いた。保護者の方たちも、日頃プロジェクターを見る機会が少なかったのか、感動の声を漏らしていた。

具体的な数字や犯罪の種類を、資料・データを用い説明。青少年にとって身近なテレビゲームや CD・DVD などに関する事例も紹介し、自分たちの身近で犯罪が起きていることを認識させ、今回の企画「Let's Study ケータイサイト」の最大の目的である、インターネットから得られるあらゆる情報に注意を払う事を促した。

データや資料等は京都府警察本部が、収集し、使用していた物を編集して利用した。警察本部の最新の資料であるため、最新の犯罪の手口やデータの正確さなど、非常に信頼ができ、現実味に富んだ資料だったが、少し難しい内容だったため、いかにして興味深く楽しく聞いてもらうかを工夫する必要があるがあった。簡単な言葉で説明したり、日常生活で起こり得る事に例えたり、参加者を指名して、説明者とのやり取りを取り入れるなどした。

しかしながら、言葉が難しすぎる場合や、大人でも分かりにくいネットの構造の説明などあり、小学生の興味が離れていくと感じられる場面もあった。資料やデータなどを小学生対象用に作り変えるなどの工夫が足りなかった事や、実例紹介のリハーサル・実施前の検討等が不足していたという反省が残るが、全体を通じて「ネットトラブルは身近に存在する」というキーワードを理解してもらえたという手ごたえを感じる事ができ、実施して正解だったという認識を持っている。

実演

「実例紹介」で学んだことを、実際に携帯電話を利用して演習した。隊員たちで実演し、その後、参加者に体験してもらうようにした。「実例紹介」の応用として、現実に行っているオレオレ詐欺や出会い系サイトの関わる犯罪を疑似体験してもらい、どのような対応ができるか等、犯罪に巻き込まれない為のレクチャーを施した。隊員が犯人役、小学生が受ける役とし対話形式で行い、こちらが用意した複数のシナリオで、上手に回避できるよう説明やアドバイスを交えながら行なった。しかし、ここでは、司会進行を努めた隊員の設問の問い方が不真剣である事や、犯人役が見えていることなどから、緊張感の欠けた演習になってしまったため、現実的な危機感が無く、小学生にも真剣さが欠ける部分が見受けられた。しかし、小学生の犯人に対する対応としては、「あなたの名前は？」「どこの病院ですか？」など、犯人が嫌がる事を聞くことができ、実例紹介で学んだことを上手に体現出来ていると感じられた。

護 身 術

大学生や保育士などに指導するにあたっては、実際に危険に直面した時に、自分たちや子供の身を守るための対処方法などの護身術をレクチャーしていますが、今回の小学生を対象としたレクチャーは、大学生と一緒に護身術をすることによって小学生との交流を深めようという狙いで行なった。

隊員が被害者役、犯人役にわかれて、腕を強引に掴まれた時に振りほどく方法や、後ろから抱きつかれた時に逃げる方法など、実際に護身術を実演した。その後、小学生と保護者の方たちに、犯人と交錯した際、合理的な力のかけ方や、少ない力で大きな効果を得られるポイントなどを、隊員による個別指導を交えながら、練習してもらった。

普段、サギタリウスチームが行なっている護身術は、大人を対象としている為、小学生が実践可能な術は少なかったですが、それでも参加者全員が真剣に取り組んでおり、十分に身に着けることができていた。しかし、危険に直面した際に、相手をやっつけようとしてしまわないか？まず逃げる事、助けを呼ぶことを一番に考えられるか？など、本質的なことを充分に理解できていたか不安である。最後に柔道部所属の隊員たちが、パフォーマンスとして高度な投げ技や関節技などを披露した際には、参加者、から歓声が上がり、大いに盛り上がった。

キャンパスツアー

キャンパスツアースタッフ(入学センター)の案内により8号館・図書館などを見学し、施設に関するクイズ問題を投げかけながら、小学生や保護者が分からないことを説明し、キャンパス巡りを行った。このキャンパスツアーは小学生や保護者の方々に、日常生活の中では訪れる機会の少ない、「大学」を見学してもらい、本学に対しての興味を持ってもらう事を最大の目的として行った。

入学試験の関係上、見学を予定していた大教室棟を見学してもらう事ができなかったが、自分たちの学校の図書室とは全く違う規模の本の数や設備などの説明を興味深そうに聞いていた。小学生からは、学校の中に本屋やコンビニ・美容室、図書館内には小さな映画館など『何でもある街みたい』という声があがった。小学生の歩行速度などを考え大幅に時間をとっていたが、元気のよい小学生ばかりで思ったより速く行動でき、余裕を持ってキャンパスツアーが進行出来た。

昼 食 会

最後のプログラムとして参加者と共にお弁当を食べながら親睦を深める事を意図とした昼食会を実施した。大学生と小学生が交互に座り、交流を図りやすいように工夫した。大学生と雑談を交わし、仲良くなる事、大学生との距離を身近に感じてもらう事が、小学生が危険に直面した時や、困ったときに、小学生が大学生に助けを求めやすくなる環境の第一歩である。本来、今回の企画の感想や、今、小学生にとって最も安いようにしたことにより身近に感じる危険は何かなどを上手に聞き出す必要があったのだが、不十分であった事や、保護者の方との会話が少なかった事などが反省点である。最後に1人ずつ順番に、感想を発表してもらい、今後の企画の材料として、隊員一同真剣に受け止めた。

全体的には、小学生と非常に楽しく食事が出来て実施して良かった。まるで小学校の給食の時間のような雰囲気になり、保護者の方も微笑みながら、大学生と交流する我が子を眺めていた。

3 中学生対象から小学生に変更した経緯

中学生を対象に企画を立てた理由

現在、中学生の携帯電話所有率は約 90 パーセント近くであり、携帯電話やパソコンを「利用している・利用した事がある」というのが当然である。そしてフリー掲示板やチャット、出会い系サイトなどを、遊び半分・興味本位で利用する子供が多くなり、それに関する犯罪も増大している。

犯罪者の若年化が進む中、本学に近い地区として北区に地域を絞り、中学生を対象に、携帯電話やコンピュータの正しい知識や悪質サイトなどの防止方法などを身につけてもらい、犯罪に巻き込まれないように注意を促す事を狙いとして企画した。

なぜ中学生が集まらなかったのか？

前年度、小学校低学年の児童を対象に防犯教室を実施した際は大変多くの参加があったが、「中学生はクラブ活動や習い事・塾など、個々の予定が入っているため、今回の企画に参加できないのではないか」という中学校教諭の意見通りになった。中学生のライフスタイルを把握できていなかった事に起因されるのだが、中学校の行事と重なりさえしなければ『多分集まるだろう』という安易な考えがあった。この事が中学生を集める事が出来なかった大きな要因となっている。

なぜ小学生対象になったのか？

前述の通り、中学生の参加希望者を集める事が出来なかった事により、急遽、対象年齢を変更して行う事となり、高校生か小学生高学年で検討した結果、佐世保での長崎小6 女児殺害事件 が起こってまだ間も無かった為、小学生を対象に実施した方がいいのではないかという意見があり、小学生の高学年(5・6)年に対象の中心に決定した。もちろんその保護者や兄弟・友人等の参加も大歓迎という姿勢で、北区の小学校5校に話を持ちかけた(柘野・大宮・紫竹・上賀茂・元町)。

対象の中心を小学校の高学年に決定したのは、既にインターネットを活用する者や、携帯電話を所持している者も存在する事に加え、そうでない者も2～3年後には携帯電話を所持し始める年齢であると判断し、大部分の小学生には今すぐ役立つ知識では無いかしれないが、防犯・自衛の観点から考えれば、今後の為の予備知識として勉強してもらうのも良い効果が得られるのではないかという考えによるものである。

4 参加者希望者が少なかった事に関する失敗と反省

小学生の、ネット犯罪に対する興味・意識が低かったこと

小学生には、まだ携帯電話を所持している者や、インターネットを頻繁に利用する者が少なく、

ネットトラブルなどに自分が巻き込まれ被害者になるという意識が希薄だったといえる。早い段階から企画の説明方法を考え、企画の内容と意図を十分に伝えられるように考える必要があったのでは無いか。

回収ボックスに関する失敗

企画の説明を行い、参加の依頼をかけていた各小学校に、申し込み用紙を回収する為の「回収ボックス」を設置していた。直接、参加を呼びかけける事が出来た小学生に、どうして参加しないつもりだったのかと問うと、「参加するつもりだったが、申し込み用紙をどこに出せばいいのかわからなかった」という声があり、回収ボックスを各学校に1つのみの設置では少なすぎた事と、職員室前という生徒にとってあまり気がつきにくい場所に設置していた事に気が付いた。

各教室に一箱ずつ設置すれば、生徒の目に留まり、友人同士の話題に上る可能性も考えられ、参加希望者の増大に繋がっていたのではないかと考えられる。

小学校との連携がうまくなかったこと

(この日に～何時から～実施します)と既に出来上がった企画を提示するだけでは、学校の先生方に企画が十分に伝わらず生徒にも十分に説明してもらうことが出来なかったのではないかとと思われる。ある小学校の校長先生からは『素晴らしい企画で、児童を参加させたいのは山々だが、計画段階でこちらとの話し合いがあれば学校の行事の一環として出来たのでは? いきなり参加して下さいと言われても、小学校側の体制が整わなければ、無責任に児童の参加を促す事は出来ない』という、厳しいが企画の意図を理解して下さり、協力的な姿勢をとって下さっていると考えられる意見を頂いた。

小学生のライフスタイルの把握不足

保護者の方からは前年度の企画評価がよかったので「行ってみたら?」と子供に参加をうながしていたが、「みんなは部活でいかへんから」など、一人で行くのは抵抗があるなどの声もあった。高学年になると個人の用事も入ってくるという事を考えに入れていなかった。

京都府警察や上鴨防犯推進協議会などの不在

今回の企画は、サギタリウスチームだけで行っていたため、学校の方々の反応は、あまり良いものではなかった。教育委員会に後援していただいていると強調しても、不安を取り除けていない部分があり(学生であるからだと思われる)、協賛していただいている団体の方より、来賓を招き、参加していただければ、学校関係者やPTA・保護者などの協力・理解もあったのではないかと考えられる。

以上のことより参加者が少人数しか集まらなかったといえる。保護者の方からは前年度の企画評価がよかったので「行ってみたら?」と子供に参加をうながしていたが、「みんなは部活でいかへんから」など、一人で行くのは抵抗があるなどの声もあった。

5 参加者の反応

小学生の感想と反応

今回来てくれた小学生は、家にパソコンはあるが、携帯電話は持っていないという者が多かった。家でインターネットを使用したことがある人は大多数であった。そのほとんどの小学生が、インターネットを利用する理由として、ネットゲームを楽しむ為と回答していた。小学生はやはり、インターネット犯罪に関する知識はほとんどなく、また警戒している様子も感じられなかった。ネットトラブルに関する知識は無知に近いものであり、「実例紹介」での犯罪の種類・手口の多さを知って、関心を深めた様子であった。帰る直前に今回の感想を聞いたら、今回の防犯教室に対して（楽しかった、犯罪に詳しくなった、護身術やキャンパスツアーなどもあって楽しく参加できた）という返答しか無かった。中には昼食が一番楽しかったという者もいて、大学生と交流する事を楽しいと感じてくれている事を実感した。実施側・参加者共に、充実した時間を過ごせたのではないかと思う。

保護者の感想と反応

携帯電話や、インターネットに関する犯罪の知識が不十分であるという事を自覚し、今回の企画に参加されていた。真剣に話を聞いており、「実例紹介」で紹介されていた数多くの犯罪の手口に、ネットトラブルへの関心を深められた様子であった。携帯電話を使った犯罪、（オレオレ詐欺、架空請求）に対しても非常に関心を持たれていた。保護者の観点から見て今回の企画は、自分の親・子供へ対しての危機管理へも繋がる知識が得られるという意味でも非常に高い評価を得ることができた。また、今回だけでなくこういった企画があれば参加したいとおっしゃっていた。

隊員の感想と反省

各担当を決め、パートごとに運営したが、自分が担当しているところの流れは分かっている、他のパートのことが分からず、連携に拙さが見受けられた。全体的なりハースルや話し合いを何度も行い確認しながら、隊員全体がこの企画の趣旨を明確にしておく必要があった。隊員全体の防犯に関する知識などがまだまだ低く、隊の中でもっと勉強する必要があった。中学校からの参加者が0名だった事にも関わらず、同じような宣伝方法をとるといったような安易な考えを持っていた事と、よりよい企画にするための改善などを怠ったことが、最も反省しなければならないことである。

総括

今回の企画で一番苦労したことは、人数を集めるということであった。この点に関しては、自分たちも反省すべき点はとても多かった。前回のサギタリウスチャレンジで行った小学生低学年対象の防犯教室では、500人近い人数が集まった。それを今回のように中学生に対して同じ勧誘方法で集めようとしたのが一番反省すべき点であった。前回、人数集めで成功した事により、今回も同様に成功するという油断と、安易な気持ちで考えて企画に臨んだ事がこの結果に繋がってしまったと全隊員が反省している。

しかし、この失敗により一つ分かったことは、小・中学生の空いている自由な時間は私たち大学生が考えているよりも少ないということである。このことから多くの小・中学生を集めるためには各学校の協力が必要不可欠であると思われる。ある学校の校長先生がおっしゃられていた「企画の段階からお話をいただければ、」という言葉が頭にこびりついています。校長先生は、学校の行事の一環としてこの企画が行うことが出来たかもしれないとおっしゃっていました。もしそうなれば一番の被害者になる可能性のある小・中学生に効率よく犯罪の怖さを伝えることが出来、そして私たちサギタリウスチームの活動意味の一つである青少年の健全な育成にもつながる事でもある。このことは私たちにとって新しい考えでもあった。

今回の企画は最終的に対象が小学生になったが、来てくれていた保護者の感想と反応から高校生や大学生、または各小中学校の保護者や先生などかなりの範囲でこの企画を行うことが出来ると確信している。これからは、本学の学生に対しての防犯教室や護身術の講演、または小学校や中学校へのデリバリー防犯教室など今回の企画で発見したことを日々の活動に取り入れていきたいと考えている。